

## 老人ホームと子供の遊び場～特別養護老人ホーム J&B～

### 1. 遊びに無限の可能性

「お姉ちゃん、ボール無くなった～」。伸び放題に生い茂る雑草の中で、消えたボールを探す。弟とキャッチボールをするのはいつもこの空き地だった。時にはフリスビーや鬼ごっこもした。当時、小学 3 年生だった私には、この空き地は無限に広がる草原に見えた。草むらの中に姿を消したボールは、1 度無くなると見つからないこともあったが、それを探すのも宝探しのような感覚で楽しかったことを覚えている。

私はこの空き地が好きだった。弟だけではなく、学校の友達、近所の友達とも遊んでいた場所だった。学校帰りにオオバコ相撲や四つ葉のクローバー探し、ただ座ってひたすらお喋りもした。空き地には公園とは違った魅力がある。何をするのも自由で、多種多様な遊びの形が存在した。想像力を膨らませて伸び伸びと遊ぶことができるのが、空き地の魅力だと今になって思う。

しかし、そんな夢の遊び場も、気づけば老人ホームになっていた。私が小学 5 年生の頃である。老人ホームの建設を知った当時、私は反対だった。遊び場が無くなるなんて受け入れることが出来なかった。私は、老人ホーム建設反対の署名を集めようか、真剣に悩んだほどである。しかし、そこには特別養護老人ホーム J&B が建った。

### 2. 特別養護老人ホームとは

(ウェブサイト名)によると、特別養護老人ホームとは、「原則として 65 歳以上で、寝たきりや認知症などによって日常生活に障害があるため、常時介護が必要な高齢者が入所する施設」である。J&B は平成 17 年 10 月 1 日に開設され、新型特養「個室・ユニットケア」方式を取り入れた特別養護老人ホームだ。入所定員は 70 名で、社会医療法人康陽会の中嶋病院と、医療法人桃友会の歯科一番町と連携している。「収容の場」から「生活の場」へというのをモットーに、「地域交流ホール研修室を活用し、入居者、利用者と家族、職員、又地域の人々と季節行事、各種催物、研修会等を行い、孤立感の無い新しい我家を感じられるように」しているのだという(康陽会 2015)。

### 3. 老人ホームと当時の地元の小学生

J&B が建った当時は、私たち小学生は老人ホームを訪れる機会が多くあった。吹奏楽をやっていた私は、老人ホームのロビーで演奏会をしたこともある。子供会の行事でも、老人ホームを訪れ、昔の遊びを教わり、老人たちとの会話を楽しんだ。老人たちも、十数人の子供たちの賑やかな笑い声や、子供がもつ独特の騒がしさなどを感じ、とても顔色が明るく、顔のしわをよりいっそう深くして笑っていたのが印象的だった。

私は、子供ながらに、老人が楽しそうにしている様子を見て嬉しかった。老人を喜

ばせたいと思っていた。そのため、イベントがない日でも学校帰りに友人と訪問し、見ず知らずの老人の部屋で遊んだりした。カラオケや折り紙を一緒にした。折り紙で作ったものをプレゼントし、喜ぶ老人の顔を見て心が温かくなる。「今日も来てくれたの、ありがとう」と言われたかった。

老人ホームの現場には、小学生には多少ショッキングな老人の姿も確かにあった。よだれを垂れ流しにしている者や、意味の分からない言葉を機械のように繰り返している者の姿も、私の脳裏には焼き付いている。当時は、恐怖さえ覚えた。それでも、老人ホームを訪問できたのは、私や友人が行くことにより喜んでくれる老人がいたからである。私たちの学校帰りの遊び場は、空き地から老人ホームへと変わった。

#### 4. 現在の小学生

しかし、そんな私たちも、中学、高校と進学すると、老人ホームを訪れなくなった。部活や学業が忙しくなり、友人と予定を合わせて老人ホームに行く時間など取れなかった。現在は、イベントの開催も減ったように思える。当時は真新しいものだったから、地域の大人たちもイベントを開催した。しかし、もう、老人ホームは珍しいものではなく、地域に定着した。老人ホームは子供の行くところではなくなった。現在の小学生は、老人ホームを訪れることはない。外で遊ぶことはおろか、外に子供の姿を見かけることも少なくなった。実際、近所の子供たちは電子ゲーム機で遊んでいる。外で遊ぶこともないわけではないが、老人ホームで遊ぶという考えはない。

一方、老人の側はどうだろう。私が訪問していたころ入所していた人々は、もういないのではないかと思う。現在の入所者たちは、子供と交流を持ちたいと思っているだろうか。当時も、子供など煩わしいだけだと思っていた人も中にはいたかもしれない。子供が来てくれて嬉しいと感じていたのはほんの一部だったのかもしれない。

#### 5. 地方自治は何を重要視するのか

老人ホームは子供の遊び場になりうるか。子どもと老人の交流は続けていけるか。そのカギを握るのは小学校である。老人ホームを訪れるきっかけを作らなくては、誰も訪れようとは思わない。小学校を中心に活動するスポーツ団体や、文化団体と連携し、イベントを開催することは可能である。子供の頃に、人を喜ばせることの嬉しさを知ることは重要だと思うのだ。前節で、老人は本当に子供の訪問を待っているのか、と記述した。喜ばない者もいるだろう。しかし、心の底から、喜んでくれる人の存在も事実である。どちらを優先すべきというのは無いが、家族と暮らせず寂しいであろう老人と、その孫世代にあたる子供の交流は、私はあってもよいと思う。子供にとっても、世代の違う人と会話をする能力の習得は、家の中や同世代との遊びの中では不可能である。子供の老人ホーム訪問を、豊かな人材の育成の1歩につなげたい。

---

i 社会医療法人 康陽会 中嶋病院ウェブサイト(2015年12月7日参照)